

光の春から色の春へ

一陽来復、冬至からわずかずつ伸びだし陽の足が、立春の声をきくとともに日に日に勢いをまして春を感じさせる「光の春」となる。暦の上で冬と春を分ける二月三日の節分が過ぎ、立春となれば寒があけて余寒とよばれる春となつて、気温が一年の底を抜けてやっと上昇に転じて春に向かうが「気温の春」はまだ先きである。それでも「光の春」を追うように雪に覆われた流れからは、雪解け水がかすかに流れだす音が響く「水の春」が追うように続く。

雪が解けて平均気温八度と言われる早春前線の北上で、列島は早春の冬枯れのモノトーンから、暖かな南風に誘われて最初に湧きだすように咲く福寿草、マンサク、タンポポ、ナタネと続く黄色の花で覆われる『色の春』を迎える。黄色は青とともに太陽光の虹の七色の中で、最もエネルギーが強い波長であり、冬の長い眠りから覚めた植物が最初に受ける色としては最適であるのもうなずける。冬枯れの木々からは新芽が萌えだし、かすかな芽吹きが紫がかつた灰色の薄いベールのように淡く森を覆い、その中にコ

ブシの白が点在する。そしてヤマサクラの白紅色に移りやがて「桜色の春」が里に下りてくる。

桜の開花前線は、真冬の一月に沖縄の山から山麓において台湾に近い八重山諸島に南下するヒカンサクラの開花で始まる。桜の開花には花芽をつくるため春化作用、バーナリゼーションという寒冷暴露と平均気温一〇℃以上という開花の条件が必要で、冬でも暖かな南国、沖縄では逆に気温の低下が必要である。その結果、寒波の南下につれて寒い山から里へ、北から南へ、サクラの開花前線が真冬の南下となるのである。

一方、本州のソメイヨシノサクラは、気温一〇℃の春の訪れとともに開花となり、三月に上陸したあと時速十キロくらいで北上する。四月末から五月初めに津軽海峡を渡ったのち北海道のエゾヤマサクラに引き継がれ、白に近い可憐なチシマサクラの開花で根室に向かう。一月に南の島のヒカンサクラの開花が始まった桜前線の旅は半年の旅をへて、北海道の東端の終着駅根室にたどりつき終わる。移ろう季節の光の主役は黄色の春の色から淡いサクラ色に移り、エゾヤマサクラの紅色が濃くなり、チシマサクラで薄くなる。葉桜を過ぎて薫風吹く初夏は、藤の花の紫から、新緑の緑の炎が一気に燃えあがる。

冬から春そして初夏へ向かう季節は光が演出する氣象の不思議な姿を見せてくれる。真冬のオホーツクの海には日の出の太陽が四角形や六角形、時にはワイングラスの姿で浮かぶ。一面の流水野の冷たい海で下層の水平線近い空気が冷やされ、気温が鋭く逆転している層ができる。と、水平線に昇った朱色の丸い太陽を、その逆転層が上半分を鋭くカットし下半円だけ残す。その半円太陽が水平線を照らし、尾をひく姿がまさにワイングラスの姿となる。四角い太陽も冷たい海に接する密度の濃い空気がレンズの役目をして、日の出の太陽が縦にグリーンと引き延ばされてできる。

海明けとなつて沖に去った流水が水平線に浮き上がって見える「幻水」や、北アルプスの雪解け水が流れ込んだ富山湾の蜃気楼も海が冷された空気の温度差のレンズによる屈折現象が演出している。春から初夏の風物誌である。

空気のレンズは、もう一つの「グリーンフラッシュ（緑閃光）」と呼ばれている緑の太陽も演出している。水平線に沈む朱色の太陽が三分一ほど隠れた時に、ほんの一瞬の間、長くとも一、二秒間その上端が緑色に輝く。沈みつつある太陽が沈まずに見えているのは空気のレンズで弓なりに曲げられた赤味がかった光が目について、

あたかも水平線の上に朱色の太陽が浮いて見えるからである。青は散乱して届かず、赤より緑の光の波長が短く曲げにくいので、日没の最後の一瞬に緑色が残ってグリーンフラッシュとなる。冷い海を西に望む海岸線で見ることが出来るが、見えたら幸運、写真を撮ることは神ワザに近いだろう。

一方、光は雲とともに多彩な春を演出してくれる。春二番 春三番と彼岸の嵐、花ちらし春の嵐の低気圧が通るが、日カサ月カサが天気悪化の兆しとなる。温暖前線上を毎秒数センチゆっくり上昇する空気が、数ミクロンサイズの氷の微結晶からなる薄いベールのような巻層雲をつくり、そのなかで屈折や反射によつて虹の輪のようなカサができる。また十数ミクロンサイズの無数の水滴が浮かぶ高層雲を通してぼんやりした月の外側に虹の環がでるが、色の順番は、虹とは逆に内側が紫で外側が赤となり輪のサイズも小さい。無数の微水滴による回折現象が原因で、一般にはグロリー、光環と呼ばれているもので、カサとはできる理屈が異なる。

この光の回折現象は、目の前に広がる雲海を舞台にプロッケン妖怪という不思議な姿をみせてくれる。山の頂上で太陽を背にして目の前の雲海に自分の影法師とそれを取り囲むように

小さな虹の環が写り、自分が動けばそれにつれて影法師と光環が不気味に動く。ドイツのプロッケン山でよく見られるというので、その名をとつてプロッケンの妖怪と呼ばれている。若きゲーテがしばしば訪れ、彼の思想、色彩論にも強く影響を与えたといわれており、日本では古来、阿弥陀様の仏に後光の環を『御来迎』という言葉をあてて崇めていた。眼下に広がる白い雲の絨毯の上に写る機影と、その回りに虹のような光環が取り巻き、機影とともに動いているのを見かけるが、これもプロッケン現象での光環である。

「山眠る」冬が光の春のまぶしさと音の春に驚かされ、眠りから覚め、「淡谷（たんや）」にして笑うが如し」とざわめき、早春から初夏に続く光と色が織りなす気象の不思議な姿が季節の縞模様とともに次々と北上する。光の春から水の春、色の春、サクラ前線に春一番、彼岸の嵐、花散らしの嵐と過ぎて薫風と青嵐が吹けばもう初夏である。

(二〇〇四年四月)